5 豪雪地の価値と豊かな豪雪知を学ぶ旅

佐藤 雅一
SATO Masaichi
津南町教育委員会

雪のないところで住む人にとっては豪雪地帯は住みづらいと思われがちであるが、豪雪地帯で人々はなぜ住み続けているのだろうか。豪雪がもたらすものと人々がどのように付き合ってきたのかを紹介していただいた。

はじめに

新潟県南部に位置する津南町は、苗場山麓にある。苗場山麓の南北軸に沿うように中津川渓谷があり、渓谷に貼り付く猫の額のような平坦地に村々が点在する。江戸時代後期にこの渓谷を探訪した鈴木牧之は、「心を洗濯する桃源郷の如し」と『秋山記行』に書き綴った[1)]。また、牧之は十返舎一九との交友から多くの文筆を重ね、名著『北越雪譜』を上梓した[2)]。この名著には、雪深い越後魚沼の様子が生き生きと描かれている。

これら牧之の視点と近代民俗の記録や雪国の暮らしを交差しながら苗場山麓の自然環境に適応した人々の暮らしの断片を繋ぐことで、生きる楽しみと知恵を探り、新しい地域の価値を探訪してみたい。

苗場山麓はいつから豪雪地になったのだろうか

北緯37度00分に位置する苗場山麓であるが、地球儀をくるりと回すならば、アテネ－ソウル－サンフランシスコなどの世界主要都市がほぼ同緯度に並ぶ。どの主要都市も基本的に雪は降らない。なぜ、苗場山麓は累積降雪量が20mに達し、3m前後の積雪に埋もれる100日があるのであろうか。

それは、日本海に対馬暖流が流れ込むことによって、水蒸気量が増大し、冬季に雪雲を発生させ、冷たい北西風にあおられ谷川連峰に当たり、その眼前にある苗場山麓に雪が降り続くからである。さて、その原因である対馬暖流の流れ込みは、遥か太古の縄文時代早期、今から約8,000年前に遡ることが知られている。すなわち、教科書で学んだ中期「火焔型土器」の時代も豪雪環境にあり、縄文人は私達が経験している3mの雪の中で竪穴住居の炉で暖を取り、100日、真白き世界に埋もれていた事実がある。

写真1　苗場山と中津川渓谷の村々

写真2　降雪時の屋根の雪下ろし

写真3　堂平遺跡出土の火焔型土器

写真4　残雪とブナの新緑

写真5　ユキツバキ

写真6　雪まくり

豪雪環境に生き抜く植物たち

苗場山麓では、氷河のある寒冷期と温暖期を交互に変動しながら、植生が変遷し、現在の豪雪環境下ではブナを中心とした森が広がる。その林床にユキツバキが繁茂し、その分布が標高の高い場所まで広がる特徴がある。葉が厚く、テカテカ光るユキツバキは、照葉樹の仲間で暖かい環境に生育するツバキであったが、湿潤の重い雪に適応したことで、現在も生育している。しかし、苗場山麓に流れる中津川渓谷の南部に至ると軽くて冷たい雪に変わるため、ユキツバキはまったく分布しない。これは、見倉集落と前倉集落を結ぶ線から南側で見ることのできる植物分布の違いである。このユキツバキの分布と重なるように樹木の「根曲り」現象も見られる。湿潤の重い雪が傾斜地に生える樹木の根元を押しつぶすことで曲がる樹勢が生まれる。この根元が曲がる樹勢を熟知し、堅牢な住宅の梁組みに利用したり、農具の柄に加工したりしている。

雪を科学する

雪は上空2,000mの高さから30分程度で落下すると言われている。苗場山麓の湿潤で重い雪は、「牡丹雪」「ボタ雪」ともいう。中谷宇吉郎の実験によれば、「温度と水蒸気量の違いにより、さまざまな形の結晶」が生まれる[3)]。それがボタ雪など多様な雪の顔を生む背景にある。積雪の断面は、雪の結晶の違いで地層のように見える。積雪の雪質は「しもざらめ雪」「しまり雪」「こしまり雪」「新雪」等に分類され、降雪段階の気温と雪質は整合する。

この雪の表面は、風で風紋が描かれたり、吹きだまりで膨らんだり、ウサギの足跡が残されたりでさまざまである。さらに自然のいたずらで「雪まくり」や「巻き垂れ」「冠雪」などの現象が説話の原点にもなっている。

苗場山麓に降る雪は湿潤の重い雪で、1m^{3}あたり1tの重さがある。そのため頑丈な木組みで豪雪地の家は造られてきた。また、この湿潤な雪は、地面を凍土化することはなく、北東北に比べれば「温かい

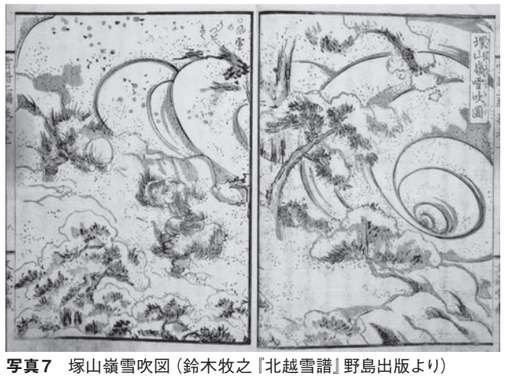

写真7　塚山嶺雪吹図（鈴木牧之『北越雪譜』野島出版より）

写真8　昭和20年の大雪（『津南百年史』より）

雪」であること、糖度を増した甘い「雪下ニンジン」が生産される特徴がある。

江戸時代の暮らしから見える豪雪

鈴木牧之は『北越雪譜』の中で、雪の恐ろしさを書き綴っている。時折、暖地に降る雪を「沫雪（あわゆき）」と称し、それを「風雅」とか「風流」と形容するが、越後魚沼に降る湿潤の重い雪は「怖い」ものであるという。雪は「どれほど積もっても固まることがなく、さながら泥」のようで、雪道は「カンジキやスカリをはいて歩かなくてはなりません」、すなわち、魚沼の雪こそが「沫雪」と呼んでふさわしいと感想を述べている。そして、「雪を巻きあげる旋風のことを吹雪」と呼び、この現象は「地を吹き抜ける風は雪を舞いあげて、白龍が山の峰を登るような勢い」で、「天地を荒れ狂って、寒風は肌を貫く槍と化し、凍った雪は体を射るようなすさまじさ」があり、その「吹雪の力は木を倒し、家をも押しつぶし」、時には吹雪に迷い「行き倒れて、人の命を奪うこともある」魔物であると書き綴っている。

しかし、暖地の古い歌には「吹雪は樹木に積もった雪が風に吹かれて飛び散るさま」を指し、「その美しさのゆえに落花にもなぞらえて花吹雪」ともいうが、そんなものではないと魔物である吹雪のすごさを述べている。

現代民俗誌から学ぶ豪雪

近代民俗誌からは、豪雪の暮らしぶりを写真から理解することができる。特に、昭和20年の豪雪は語り継がれてきた。当時の7.85mの積雪記録が苗場山麓の森宮野原駅にある。現在のような消雪パイプの設置や重機による除雪体制が整っておらず、電信柱に張られていた電線を跨いで歩く様子が写真に残されている。

雪を知って楽しむ暮らし方

春のお彼岸でも積雪は多く、苗場山麓の墓は雪の下である。古くから墓の上に雪で壇を造成し、それを「雪墓」と呼び花や青木を供え、お彼岸を弔う風習が現在も残されている。白い雪原に点在するき

写真9　雪墓

写真10　スノーシューを履いて

写真11　雪下ニンジン

れいな花や青木が春の陽光を浴びて美しい早春の歳時記である。

苗場山麓は、信濃川河川敷が標高177mで、苗場山山頂は2,145mあり、直線距離約25kmで約2,000mの比高がある。この比高を背景に里－里山－深山口－深山へと地勢環境が変化し、それに伴い雪解け時期が異なる。すなわち、早春に始まる山菜採りの時期が順次移動する。言い換えれば、数多くの春の旬を頂く楽しみがある。

また早春のブナ林を、スノーシューを履いてのハイキングは格別である。雪原に残された獣の足跡を見比べたり、こっそりカエデの木に小穴を穿ち樹液をゴクリ、樹木の柔らかな春芽に触れ、淡い緑のカーテンからそそぎ揺らぐ陽光を浴びることに、春の幸せを感じるのである。さらにブナ林の林床に静かに解けた雪解け水が浸み、地下深く流れ、基盤の苗場溶岩層のクラックやガス溜まり空洞に溜まり、約40年の歳月を費やして湧き出る水がある。そのひとつである名水百選の「龍ヶ窪」の水は超軟水で、多くの水愛好家が汲みに訪れ、その水で美味しいコーヒーやウイスキーの水割りを飲み、魚沼コシヒカリを炊くという。さらに残雪を掘り、雪下に埋もれているニンジンを掘り当てる。これが甘くて美味しく、ニンジンスティックにマヨネーズと少しの醤油を垂らして、ひとかじり、旨い。このニンジンスティックや木の芽（ミツバアケビの芽）、タラの芽、ワラビにゼンマイ、諸々、酒のつまみである。

100日、真白き世界に埋もれているからこそ、この早春の景観や旬の味によろこびを感じ、惚れてしまう、雪国に暮らす人々の思いがある。

おわりに

「豪雪」という言葉は、ややもすると負の言葉として理解されている。それは現実であろうが、車社会でない一昔前までは、利得としての雪があった。雪があるために沢などの凹凸が緩い傾斜地になり、大木や大きな石をソリに載せて運んだ。深山での山菜採りでは、雪解けが進み「おかめ岩」が顔を覗かせると、沢に掛かるスノーブリッチが薄くなり危ないサインである。深山の雪形を見上げ、畑の二十日石が姿を現すと20日後の種まきの準備と知る生きる知恵があった。

四季の鮮明な自然環境に身を置き、静かな時間の中で安全な食と家族の時間を大切にする生き方が問われてきた知の世紀、雪国は変わりつつある。新しい価値観の中、雪が育んだ恵みに光を当て、リモートで仕事をこなし活き活きと暮らす若人がジンワリと増えつつある。

「100年後も雪国であれ」とスローガンを打ち立て、コンクリートジャングルで働く首都圏民に日常から離れ、いつもと違った体験を楽しみ、心身の回復のために「雪国リトリート」を提供する動きが苗場山麓にある。都会と苗場山麓の山里を繋げる素敵な動きが人と人の交流を生み、山里の新しい価値を共に語り、保全し、深い歴史文化に浸り、ゆっくりと歩けるリトリート公園の可能性が見えてきた。

<参考文献>
1）鈴木牧之　1972『秋山記行』野島出版
2）宮栄二監修　1970『校註　北越雪譜』野島出版
3）武田康男　2016『雪と氷の図鑑』草思社